

Book Review



i-TFC 根築 1 回法による 歯根破折歯の診断と治療

眞坂信夫 編著
福島俊士・下野正基・眞坂こづえ 著



Reviewer

阿部 修 Shu Abe
(東京都・平和歯科医院)

A4 判, 176 頁
オールカラー
定価 (本体 12,000 円+税)
医歯薬出版刊



どんなに歯科医学が進化したとしても、本来人間が有する天然歯よりも優れた人工歯は存在しない。

最後の最後まで天然歯を残したいという、強い信念で日々診療をしているつもりであるが、どうしても困難な場面に直面する。それが歯根破折である。ひとたび歯根破折が発見されると、そのとたんに保存学の基本セオリーは通用しなくなり、目の前に大きく「抜歯」という選択肢が現れる。患者にとっては痛みとともに一本の歯を失うことを意味し、術者にとっては現代歯科医学ではどうすることもできないという、やりきれない敗北感を感じさせられる瞬間である。歯根破折歯への確実な保存療法の確立は、その症例数の多さからも、これからの歯科医学における最も重要なテーマであると強く感じる。

この難しい問題に対して、30 年以上上前より真正面から取り組み、膨大な数の臨床症例とともに、その方法論から基礎的背景に至るまでをも真摯に検証してきた歯科医師が存在する。それが本書の著者である眞坂信夫先生であ

る。この書籍は、著者の長年にわたる歯根破折歯接着修復の集大成であり、数十年を経た実際の臨床経験から確立した歯根破折歯の診査・診断から、破折の状態による分類、そしてそれに応じた細やかな術式の詳細や治療に必要な器具・材料に至るまでのすべてが、数多くの症例とともに詳細に解説されている。症例は 20 年を超える長期症例も多数示され、一般に予後が厳しいと考えられている歯根破折歯への見方が変わる圧倒的な説得力がある。

著者は、破折した歯が接着によって元に戻るとは決して考えていない。破折部の感染源を除去し、科学的根拠に基づく高度な接着技術によって形態を回復し、そして修復した破折歯の状態を生物学的に受容しつつ、咬合に対して力学的に考慮した回復を行うこと、そして必要に応じた術後の対応と適切なメンテナンスの重要性を説いている。さらに、このような難症例に対応するためには、患者との信頼関係、特に治療に関する説明と同意がきわめて重要であることを強調されている。そのために必要な説明文書や治療に関す

る同意書等、実際に著者が使用してきた生きた資料が惜しみなく公開されていることはきわめて貴重であり、読者の一人として心から感謝する次第である。このような深甚なる配慮があるからこそ、20 年を超える歯根破折歯の長期経過症例を報告できるのだと感じた。

歯根破折で抜歯となる歯は溢れている。近年、アクセルソンらは歯を失う原因が、齶蝕や歯周病から、歯根破折にシフトしていることを報告した。それは著者が 18 年前に予言したとおりであり、その傾向は今後もさらに強まることだろう。通常であれば諦めてしまいそうな症例に着手し、患者の希望を叶えようと挑む臨床医としての姿に大きな感銘を受けた。

抜歯を決断する前に、もう一手私たちにできることがある。それを実行するためには、何を知る必要があり、どのような手技が望ましいのか。本書はこれから歯根破折歯接着修復に携わろうとする歯科医師にとってのバイブルであり、今後の歯科臨床、研究に大きな示唆を与えるだろう。